The Young Women's Christian Association
YWCA

8
AUGUST 2017
No.739

www.ywca.or.jp

〈第32総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―

〈日本YWCAの使命（ミッション）〉
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

〈日本YWCAのビジョン〉
地域で女性達が主体的に活動することを通して、
以下の社会をめざします。
(1) 平和憲法が生かされ、核も暴力もない社会
(2) 女性と子どもの尊厳を守る社会
(3) 若い女性がリーダーシップを発揮する社会
(4) 多世代・多文化で多様な背景を
持つ人びとを尊重する社会

特集 『原爆の図』丸木位里・丸木俊に学ぶ
5面 丸木美術館ガイド
6面 静岡YWCA「原爆絵画展」のあゆみ
7面 希望をつなぐコンサート

『原爆の図』画家 丸木位里・俊に学ぶ

戦争を止められなかった私たちも地獄行きだ

絵本『ひろしまのピカ』の作者・画家の丸木俊さんは、夫で画家の位里さんとの共同制作で、連作『原爆の図』（全15部）を30年以上かけて描きあげた。1970年に「『核』否定の思想に立つ」をビジョンに掲げたYWCAは、かつて「人間」と「罪」を追求した夫妻と交流し、大きな影響を受けてきた。夫妻と親交のあった東京YWCA会員鈴木伶子さんに、今も心に残るエピソードを寄せていただいた。唯一の被爆国の日本が、戦争へと舵を切りつつある今、丸木夫妻のメッセージに改めて耳を傾けたい。

丸木位里（1901～1995）と丸木俊（1912～2000）都幾川のほとりで

被害と加害の記憶を描く

丸木美術館の入り口には「広島・南京・アウシュビッツ」と掲げられていました。

丸木位里（いり）・俊（とし）夫妻は、原爆投下直後の故郷広島で見た惨劇を描いた『原爆の図』を1950年に発表。それから原爆の被害の記憶を制作し続けました。1970年代になると、夫妻の視線は「加害」へと向けられます。『南京大虐殺』（1975年）、『アウシュビッツ』（1977年）と、人間を人間として扱わない虐殺を描き、さらに戦争に限らず、効率優先、利益重視の現代産業もまた人間の尊厳を奪い、人間の命を奪う暴力と考え、水銀中毒公害を描いた『水俣の図』（1980年）を世に出しました。

1970年に「『核』否定の思想に立つ」を掲げ、戦争反対と同時に、自らの便利さ・快適さを追う現代文明に問題提起をしていた日本YWCAは、多くのことを丸木夫妻から学びました。当時の日本YWCA会長・関屋綾子さんは丸木美術館館長も務められました。また、美術館から『原爆の図』をお借りして持ち回りで展示した地域YWCAも多く、今でも甲府と静岡のYWCAは続けています。私たち会員も、たびたび見学に行きました。

全15部におよぶ『原爆の図』の多くが、被爆直後の広島の惨劇を描いたものです。地上温度6000度の熱線が広島一帯を焼き尽くし、崩壊させた様子に圧倒されます。その中には、死んだ母が抱きかかえている乳飲み子の絵、皮膚が剥けた姉妹が抱き合っている絵もあり、原爆は人間の上に落とされたのだと実感させられます。

核兵器投下の被害国として、その非人間的な殺戮と、はるか後まで続く放射線の苦しみを伝えることは、日本の義務です。今年、日本が核の恐ろしさを訴えながらも

エンパワーするNGO YWCA

2017年度 加盟YWCA中央委員会報告

若い女性のリーダーシップ養成に向けて

第32総会期最初の加盟YWCA中央委員会が、
5月26日～28日、新緑の鮮やかな東京代々木のオリンピックセンターにて開催。
昨年11月の全国総会で選ばれた新しい運営委員と、
各地域YWCAの会長・総幹事（代議員出席44名）が顔を合わせた。

●議事では今後4年間の委員会の目標、事業計画や決算、予算などが協議、承認された。続くセッションでは、加盟費を用いてのさらなる全国運動の展開と算出基準について改めて確認し、意見交換の場をもった。

●今総会期中に全地域が「地域YWCAを主体とした活動」に参加することをめざし、次回のエントリーに向けた実践的セッションを行った。憲法、核、ユースのリーダーシップなどテーマ別グループに分かれて、企画立案からエントリーシート記入までの流れを体験した。

●研修「あの子がほしいプロジェクト」では、「ペルソナ・マーケティング」を応用して

YWCAでともに働きたい「あの子」へのアプローチを考えた。年代別に分かれてお互いのライフスタイルの共通点を探るワークでは、同年代ならではの「あるある話」で盛り上がった。

●今総会期の重要なテーマの一つが「若い女性のリーダーシップ養成」であることを受けて、セッション2では「若い女性のリーダーシップは、どうやって育成するの!?」がもたれた。国連女性の地位委員会（CSW）やオーストラリア・アデレードYWCAなど世界で見聞を深めたユース、そして熊本YWCAで新しいプロジェクトを立ち上げたユースが、それぞれの体験や学びを報告。さらに、シニア会員を交えたパネルディスカッションでは、若い女性に訴求するためのアイデアや課題の提起など生き生きと語った。また、YWCAの魅力として、地域を超えた人と人のつながり、そして若者のアイデアを尊重し、美味しいごはんで〝胃袋〟をつかみつつ、温かく見守る〝おとな〟の存在が挙げられた。

●「YWCAフェスタ」を、2018年5月19日（土）から20日（日）京都で開催することが決定。次回の中央委員会もその期間内に行われる。来年は京都でお会いしましょう！

（編集部）

ご協力ありがとうございます

賛助費
寺島順子　鹿野幸枝　郡恭子
鶴崎祥子　内海公子　安田寛子

ピースメーカーズ募金
（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
鹿野幸枝　鶴崎祥子
梅花中学校・高等学校

災害時支援募金
（国内外の災害被災者支援）
鶴崎祥子

（オリーブの木キャンペーン募金）
鶴崎祥子

東日本大震災被災者支援募金
小林瑛子　鶴崎祥子　柏木妙子
大阪女学院中学校高等学校宗教部
学校法人捜真学院　捜真女学校

（2017年4月16日～6月15日現在 敬称略）

「ひろしまを考える旅」開催！

「『核』否定の思想に立つ」の実践として日本YWCAが1971年から続けている「ひろしまを考える旅」をこの夏も開催します。ユースとともに、〝ひろしま〟から平和について考える活動です。皆さまのご寄付によるご支援を受け付けております。

ピースメーカーズ募金

郵便振替
口座番号 00170-7-23723
加入者名 公益財団法人日本YWCA
※通信欄に「ピースメーカーズ募金」とお書き下さい

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子／偶数月1日発行
旬な情報発信しています　メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp にお名前を送ってください ／ フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

『原爆の図』第2部「火」

核兵器禁止文書に賛同しなかったことは、周囲の国もいぶかったと言いますが、政治家に見てほしい作品です。

和解をもたらす絵画

『原爆の図』のうち第13部『米兵捕虜の死』（1971年）と第14部『からす』（1972年）という2枚の絵は、私がひそかに「奇跡の絵」と名付けているものです。

『米兵捕虜の死』は、爆撃に来て落下傘で降下した、女性も含む23人の米軍捕虜が、原爆投下後、捕らえられていた地下室から逃げ出したところを、原爆投下に怒り狂った広島市民が石を投げて殺したことを描いた絵です。被害者である市民が加害者にもなるという深刻な絵です。

1972年、マレーシアYWCAのクーマラサミ総幹事が来日した時のことです。彼女の夫は日本軍に逮捕・拷問され、日本敗戦で解放されたときには廃人になっていました。広島の平和記念資料館を見学しても彼女は冷たい反応でした。後日、丸木美術館にお連れして、丸木俊さんと関屋綾子さんに案内をしていただきながら、日本の加害を描いたこの絵を観ました。見学を終えたクーマラサミさんは、このように語りました。

「〝広島〟を訴える人たちが、自分たちの苦しみとしてだけ訴えているように感じていました。でもこの絵が訴えている苦しみを通して、本当の和解の意味を探し求めることが大事ではないでしょうか」。以後、彼女はマレーシア各地で核兵器廃絶を訴えたそうです。

『米兵捕虜の死』と『からす』展示室

お互いの痛みを知って

『からす』は、広島に強制連行された韓国・朝鮮人が被爆後、助ける人もなく放置され、遺体に、からすが群がって遺体をついばむという絵です。上部には、故郷に向かって飛ぶチマチョゴリの姿が描かれています。

1987年私が日本YWCAに就職して最初の大仕事が日韓YWCAコンサルテーションでした。韓国YWCAの指導者たちは植民地下で身につけさせられた日本語で話しました。その中でパク・スーニャン総幹事だけは、通訳を通して協議を進めていました。それが丸木美術館を見学した翌朝、パクさんが日本語を話しているのです。わけを聞くと、彼女は日本植民地下での女学生時代には日本語コンテストで一位になるほど日本語が達者だったというのです。あるとき、抗日運動で投獄された家族が待つ故郷に戻る汽車の中で、乗り合わせた日本兵から屈辱的な差別を受けて深く傷ついたそうです。日本の敗戦と同時に、彼女は完全に日本語を心の内から締め出していました。ところが『からす』を観たことで、日本の画家が朝鮮人の苦しみを理解し苦悩して描いたことを知り、心に溜まっていた悲しみ・苦しみ・辛さなどの塊が溶けたのでしょう。韓国では「恨（ハン）が溶ける」といいます。

罪を背負い描いた『地獄の図』

1985年、人類の罪を次々と描いた丸木夫妻は、最後に『地獄の図』（ブルガリア国立美術館蔵）を描きました。戦争をした東条は悪い、ヒットラーも悪い、ムッソリーニも悪い、みな地獄行きだと、夫妻は戦争の責任者を次々と描きこんでいきました。そして最後に「戦争を止められなかった私たちも悪い。私たちも地獄に行くのだ」と言い、位里さんは俊さんを、俊さんは位里さんの姿を『地獄の図』に描き込んだのです。

原爆の図丸木美術館提供

同じ年、私は、アジアキリスト教協議会の平和会議の宿舎で、俊さんと同室になり、少し恐縮しながらも、とても楽しい二日間をご一緒に過ごさせていただいたことがあります。二日目の夜、夫の位里さんから電話が入りました。俊さんは楽しげに話した後で「では、また地獄で会いましょう」と電話を切りました。そして「地獄の友達からの電話だったのよ」とおっしゃったのです。私は、「『地獄の図』のことは伺っています。戦争をとめられなかった私たちの罪ということを深く教えられました」と言い、その後、ちょっとためらったのですが、思いきって付け加えました。「私たちキリスト者も戦争に加担した罪を告白しています。ただ、私がキリスト教を信じているのは、そのような地獄行きの罪を犯している私たちを、神様が見捨てずに、地獄まで一緒にいらっしゃって下さるからなのです」

「ひろしまを考える旅」の委員に語る晩年の俊さん

しかし、俊さんは、そのまま眠ってしまわれたので、私の話は宙に浮いたままで終わりました。

人間とともに地獄に行く神

翌朝、食事のとき、俊さんが「鈴木さん、昨日の話をもう一度してちょうだい」とおっしゃったのです。何のことかといぶかる私に、「神様が地獄に行く話よ」と。そこで私はイエス・キリストのことを話しました。償うことの出来ない罪を犯す人間、その人間の罪を償うために神の子がこの世界に来られたこと。苦しむ人の仲間となり、理不尽な裁判で十字架刑に処せられたこと。私たちキリスト者が唱える信条は、イエス・キリストが「死にて葬られ、黄泉（よみ）にくだり」と述べていること。これらをお話すると、俊さんは話の途中から食事を中断し、頭をたれて聞いていらっしゃいました。話が終わってもしばらく無言でした。やがてポツリと「すごい話だ」とおっしゃったのです。

戦争を止められず、多くの人を死に追いやったことが地獄行きの罪深さだと心底認め、自分と愛する夫を戦争犯罪人として地獄の絵に描き込んだ、そのような徹底した罪認識がある俊さんゆえに、神の独り子が地獄にいる私たちとともにいてくださるということの「すごさ」を感じられたのでしょう。キリスト者として平和を求める働きをしているつもりでしたが、「戦争を止められなかったら本当に地獄行きの重大な罪」とまでは徹底していなかったことを、俊さんから教えられました。

かつての罪を繰り返さない

この夏、日本では、安全保障法・特定秘密保護法に続き、テロ防止という名目で、共謀とみなされれば誰でも罪に問われるおそれのある法律が成立しました。いよいよ戦争をする国になっていきます。後世の人々は、2017年に、あれほど明らかに戦争への道を進んでいたときに、どうしてそれを止められなかったのかと、私たちに問うことでしょう。「戦争を止められなかった私たちは地獄行きだ」という丸木夫妻のメッセージに真剣に耳を傾け、かつての罪を繰り返さないようにできる限り努力したいと心から願います。

東京YWCA会員　鈴木伶子

機関紙「YWCA」に残る
丸木俊さんメッセージ

厳しい告発と限りない人間愛

1970年「『核』否定の思想に立つ」を掲げてから、YWCAは丸木俊さんとの交流を深めてきた。多くの地域で開催された原爆絵画展の講演会、グループによる美術館訪問など、俊さんがYWCAに語った言葉が、70～80年代の機関紙に残されている。一部を再構成して紹介する。

「私たちは、あるべき人間として平和をつくりだそうとする丸木さんの粘り強い、そして美しい姿に心をうたえた」憲法研究会で訪問した会員の談（1972年6月号）

『原爆の図』を描き続けて

はじめは、憤りで描いていたのですが、これは一体誰が殺したかなどという問題ではないのだ、私が原爆を落とす手だったかもしれない、人間とは一体何なのだろう、と考えさせられて、それを画の中で追求し続けています。

（1973年2月号）

この絵を持って日本中、世界23カ国を歩き、さまざまな人たちに会い、話をしました。日本は被害者であるばかりではなく加害者でもあることを知りました。日本人がやったことを恥ずかしいと黙っていたら、戦争を許すことになる。だから私は描き続ける。本物を見る、本物を聞く、本物をしゃべる、そして本気で考える。この姿勢を忘れません。

（1979年11月号）

『米兵捕虜の死』の理由

アメリカでの展覧会には、多くのアメリカ人が命懸けで協力をしてくださっていた。それまでアメリカを一括りに憎んでいた私の思想は、民族主義的排外主義ではないか。なんという愚かであったか。

（1972年6月号）

丸木俊さんが鈴木伶子さんに贈ったイラスト（1985年）

（被爆した米軍捕虜のことを）広島に調べに行き、目撃者からさまざまなことを教えられました。米兵は被爆によって死ぬ前に、日本人によって虐殺されていたのです。これには、まいりました。「あなたの爆弾であなたの息子も死んだのだからやめた方がいい」と訴えるつもりで描こうとしたのが、その前に日本人が虐殺したのだから。

（1971年8月）

『からす』に寄せて

長崎の造船所では5000人の朝鮮人が集団で被爆し、即死したそうです。広島でも3500人が被爆して亡くなりました。強制連行されて、朝鮮人だということで警戒されて、散らさないように集団にして扱われていたために集団被爆したわけです。

5000人の遺体は放って置かれてウジがわき、腐って、たくさんのカラスが飛んできてついばんだ、といいます。

「お前は朝鮮人だ」と、一つのかたまりとして見なすことは、自分たち以外のものと敵対する場合、都合のよい考え方になるのだと気がつきました。それが戦争に駆り出されていくとき非常に役立つのです。すなわち「差別」を培養することは戦争遂行のために都合がいい。私たちはそれを、なくさなければなりません。

（1972年8月号）

次の世代への思い

私も60歳になり、少々慌てています。この闘いは並大抵ではありません。途方にくれます。絵を描けば戦争が止むとは信じていませんが、何もしないで死ぬわけにはいきません。子や孫へのプレゼントと思って描けるものは描き残したい。

（1972年6月号）

「あのとき棒が来た」と、生き残りの一人のおばあさんが言いました。手りゅう弾ひとつで5人死ねるが、それももうありません。日本兵に棒で横顔を打たれたそうです。

一人の日本兵が白い旗を立てて歩いて行きました。もう一人の日本兵が、彼を背後から撃ちました。天皇陛下より先に降参したから、と。エメラルドの海は紅に染まりました。

子どもを連れた女のいるところでは、集団自決などあり得ないことでした。男は格好よくふるまったが、女はなりふりかまわず子どもを生かそうとしました。この「なりふりかまわず」が人類を救うのです。

（1984年8月号）

記事が伝える丸木夫妻の生活

美術館の裏に、夫妻は弥生時代の住居を再現した。ここで位里さんは朝早く瞑想にふける。母屋の周囲には鶏が放し飼いにされ、畑では野菜が育っている。いろいろな人が美術館を訪れては、しばらく滞在するというのが日常的であるようだ。畑を耕し、思索をし、ものを作り、人が訪れ、語り合う。おそらく人間にとって基本的と思われる生活が、ここでは自然な形で営まれていた。（1983年10月）

50年目の丸木美術館ガイド

『原爆の図』に会いに行こう

連作『原爆の図』を1日に1人でもいいから見てほしい……。そんな丸木夫妻の願いから1967年に開館して50年目を迎えた丸木美術館。埼玉県の中央部、東松山の自然豊かな高台に建つ小さな館内には、日本の加害と被害を圧倒的なスケールで描いた作品が展示されている。百聞は一見にしかず、さあ『原爆の図』に会いに行ってみよう。

都幾川と付帯施設

温かなお出迎え

巨大な屏風絵が圧倒的な存在感を放つ

画家の丸木位里・俊夫妻が原爆の惨禍を描いた『原爆の図』に会いに、丸木美術館を訪れた。

最寄りの駅からはバスやタクシーもあるが、晴れた日ならウォーキングがお勧めだ。池袋駅から東武東上線急行で約1時間、つきのわ※駅で下車する。駅員さんにもらった地図を片手に、のどかな道を歩くこと30分。

『原爆の図』展示室

体育館のような水色の建物にたどり着く。外観が継ぎ接ぎなのは、1967年の開館当初は平屋建てだったが、作品が増えるにつれ、増改築を繰り返したからだ。50年目を迎えた現在、全15点の連作のうち14点が展示されているが、作品の劣化が進み、寄付を募って新館建設をめざしている。

まずは2階の展示室に足を踏み入れると、原爆の図の巨大な屏風絵が圧倒的な存在感を放っている。広島出身の位里は原爆投下直後に故郷に戻り、俊とともにそこで焼け野原と化した街を幽霊のようにさまよう人々の姿を目に焼き付けたという。このときの経験から描かれた第1部『幽霊』、第2部『火』、第3部『水』は『原爆の図』三部作（1950年）と呼ばれ、絵画という媒体を通して原爆がもたらした死と破壊を伝え、核兵器のある未来へ警鐘を鳴らしている。GHQの下で原爆報道が統制されていた1950年代には、原爆の被害の実態を被爆地以外の人々に伝えるために『原爆の図』の全国巡回展が行われた。

足を運ばなければ感じられないものがある

1954年の第五福竜丸事件をきっかけに高まった原水爆反対運動を扱った第10部『署名』（1956年）、被害経験からアジアへの加害が強調されるようになった1970年代には、在日朝鮮人の被爆を主題にした『からす』（1972年）――作品をたどっていくと、夫妻の魂の探求がその時代の出来事と学びの深化によって形を変えながら継続したことが分かる。1階の新館ホールの四方の壁を取り囲む『南京大虐殺の図』（1975年）、『アウシュビッツの図』（1977年）、『水俣の図』（1980年）、『水俣・原発・三里塚』（1981年）の4つの壁画には、女性に対する暴力、ホロコースト、公害、そしてもう一つの「核」である原発など、夫妻の想いが凝縮され結晶化しているように感じた。

ひと休みして「絵」から「人物」へと視点を変え、夫妻それぞれの作品や家族の絵を観る。原爆の図が、日本画家の位里と洋画家の俊という「水」と「油」の画家による実験的なコラボレーションであることに改めて気付かされた。

鑑賞を終えたら外を回ろう。豊かな自然に囲まれた庭には、晩年の夫妻のアトリエ、休憩所、原爆観音堂が立ち並んでいる。眼下の都幾川の眺めは位里の故郷、広島の太田川の風景と似ているという。『原爆の図』の前に実際に立つという体験。そして丸木夫妻が生きた土地を踏んで、同じ景色を見るという体験」。その「場所」に足を運ばなければ、感じられないものがある――同美術館学芸員の岡村幸宣さんの言葉を噛みしめた。

札幌YWCA会員　吉田亜希

原爆の図 丸木美術館

電話	0493-22-3266
開館時間	9:00～17:00（冬季は9:30～16:30）
休館日	月曜（祝日の場合は翌平日）
料金	一般900円、60歳以上800円、18歳未満600円、ほか割引あり
住所	埼玉県東松山市下唐子1401
ホームページ	「丸木美術館」で検索
アクセス	東武東上線東松山駅からバスで約20分、森林公園駅からタクシーで約12分、つきのわ駅から徒歩約30分

※つきのわ駅にはバス、タクシーがないので注意

観客との距離が近く、まるで対話をするようだ（塩釜キリスト教会）

ディエゴ・カエターノ＆田辺いづみ

希望をつなぐコンサート報告

あの日から6年 ひと時のやすらぎを届けるために

東日本大震災で被災した方々にコンサートを届けようと、YWCA会員と数名の有志が立ち上がり、アメリカで人気の気鋭ピアニストを迎えてチャリティコンサートを横浜で実施。その収益金で被災地の福島、塩釜、石巻、気仙沼を巡回して、360人に音楽と祈りを届けた。3日間のツアーの様子をご報告。

収益金で実現した被災者のためのコンサート

「今まではお金お金と思うばかり、はずかしい。本当に心を洗われる思いです。これからは農業を通じて世の中につくしたいなぁとつくづく感じました」

これは塩釜キリスト教会で行われたコンサートの後に寄せられた感想の一つです。書かれたのは、大津波による壊滅的な被害を受けた仙台市若林地区の方です。若林地区では多くの農家が塩害を被り苦難を強いられました。その方が2人の演奏者と出会い、真心からの音楽に接してこのような感動を経験されたことに、私たちは大変驚き、私たちもまた自分の生きる土台を見つめ直す契機となりました。

今回の企画は、まず横浜のフィリアホールで有料コンサートを行い、その収益金により同じ演奏者を被災地にお連れし、被災された方々にコンサートをお届けするというものでした。

演奏者は、ブラジル出身でアメリカ在住の新進若手ピアニスト、ディエゴ・カエターノさん。これが初来日です。そして、メゾソプラノの田辺いづみさん。オペラやリサイタルで活躍する傍ら、被災地にも何度も足を運び、心に染みる歌声を届けています。

6月9日、この企画の趣旨に賛同し、500人もの方々がご来場くださり、横浜でのコンサートが行われました。その皆さまの思いと祈りを携えて、まずは福島を訪問しました。福島YWCAの行き届いた準備により、福島駅近くのホテル8階の山々が見渡せる最高の会場に、満席のお客様を迎えることができました。お二人の渾身の演奏は、お客様の心に深い感動を呼び起こしたようです。私はこれほど多くの方々の涙を見たことはありませんでした。

華やかなドレス姿で歌う田辺さんに見入る園児たち（愛耕幼稚園）

演奏を通して生まれた人と人との温かな交わり

2日目の公演は、午前中に塩釜キリスト教会、夕方は石巻山城町教会を訪ねるハードなものでしたが、平日にもかかわらず、いずれも教会堂一杯のお客様がいらしてくださいました。これは教会の皆様が口コミや地方紙で宣伝をしてくださったおかげです。

最終日は、気仙沼です。津波で流された地域はまだ整地作業の真っただ中、宿泊先のビジネスホテルの周りでは、道路も工事中でした。会場は歴史ある気仙沼教会に隣接する愛耕幼稚園です。園児に合わせて短い曲目にしました。赤いドレスの田辺さんを見た子どもたちの「かわいい!」の歓声で始まり、カエターノさんが弾く英雄ポロネーズが響くなか、園児、お母さんたち、そして若い先生方の感嘆と感動が広がりました。

石巻山城町教会での公演の最後、関川祐一郎牧師が、「聖書の言葉と同じように、音楽も人の心を癒すものです」と、来場者に呼び掛けられました。多くの人々の祈りが運ばれ、真心が込められた演奏がなされるとき、そこには温かな人と人との交わりが生まれ、それはまさに神様の愛をお届けすることになるのだと、改めて気付かされた3日間でした。

多くのYWCA会員の方々にさまざまな形で応援していただきましたこと、心より感謝いたします。

希望をつなぐコンサート実行委員会
横浜YWCA会員　遠藤真理

ディエゴ・カエターノさんと田辺いづみさん（福島会場）

静岡YWCA「原爆絵画展」のあゆみ

広島市民が描いた真実を伝え続ける

1976年、広島の被爆者が描いた原爆絵画の展覧会が神戸YWCAで開かれた。その後、大阪、名古屋、京都、甲府のYWCAが加わり、原爆絵画を持ち回りで展示するネットワークを構築。1984年には、創立したばかりの静岡YWCAが連なり、原爆の惨状、被爆者の思いを地域の人々に伝えてきた。97年に協力開催は終了したが、甲府と静岡では今も続けられている。創設したての静岡YWCAは絵画展とともに発展した。そのあゆみから、地域における原爆絵画展の意義を考える。

■ジュラルミンケースで運ばれた絵画

静岡YWCAが1981年に創立された直後から、現在までずっと行ってきた活動に「広島市民が描いた原爆絵画展」がある。この絵画展は、広島で被爆をした男性が1974年、「死ぬまでに描き残したい」と、自らの体験を絵にしてNHK広島放送局に持ち込んだことに始まる。この1枚の絵が、市民の手で原爆による惨状を絵画にして後世に伝える運動へと発展し、たくさんの絵が寄せられ、各地で原画展が開催された。

1976年、被爆者の支援活動をしていた神戸YWCAで「原爆の絵の原画展」が開かれ、大阪、名古屋、京都、甲府の各YWCAに広がった。静岡YWCAは創立したばかりであったが、この運動を知って立ち上がり1984年、最初の原爆絵画展を開催した。当時、原画は重いジュラルミンケースに入れて会員の手で運ばれていたが、その受け渡しは、労力も経費も要したと聞いている。

駅ビルで開かれた第一回の絵画展には、丸木夫妻の『原爆の図』の一つ『とうろう流し』も展示された。「3日間の開催で2500人が訪れ、原爆絵画50点の絵画を若い親子や中学生が見入った」と地元新聞の記事に残っている。

■今の問題にも目を向けたピースフェスタに発展

その後は会場を転々とし、入場者も減少傾向にあったが、創立10周年を迎えた会員は、原爆絵画の展示の意義を思い、自分たちの活動は「平和をまもること」にあるのだとの決意をして、その思いを「100人のピースキルト」に表した。このキルト制作は後年、憲法9条、97条、前文を綴ったタペストリー制作に発展。現在も展示会場に飾っている。

活動を重ねるなかで、在韓被爆者や従軍慰安婦の問題に目を向けるようになり、写真展、独り芝居、スタディツアー、映画上映など多角的なプログラムでアピールする「平和展」へと拡大した。また、原爆を含め、戦争は決して過去のことではなく、今の問題でもあるとの認識から、チェルノブイリの原発事故や沖縄の基地問題を取り上げ、現地で活動するフォトジャーナリストの写真展、ゆかりの歌手によるコンサート、さらには基地反対運動をリードする阿波根昌鴻さんを伊江島に訪ねるなど意欲的に活動を展開した。

21世紀になり名称を「ピースフェスタ」に改めて新時代の1歩を踏み出した。丸木夫妻の『原爆の図』は展示に加えていた。2001年に丸木美術館を訪れて連作を鑑賞したときの深い思いから、創立30周年の『原爆の図』全作展示（縮小版含む）という大々的な企画につながった。

■小さな関心を喚起させ大きな希望につなげていく

平和のメッセージの基として広島の原爆を位置付けるとともに、活動の課題にあったのが、次世代に伝えていく使命である。この数年は市民ギャラリーを会場にしているが、思いがけなくも中学生との接触がもてるようになった。公立中学の美術部の作品展が同じギャラリーで同じ期間に行われるので、お互いに入場しあうようになったのだ。広島での被爆者が何を伝えたいのか、今の平穏に見える暮らしに何が起ころうとしているのかを、言葉を探しつつ奮闘する私たちおばさんたちと一緒に考えてほしいと切望している。今年も平和展の暑い季節を迎えている。小さな関心、勇気が大きな希望を生んでいくことを感じてもらいたい。

静岡YWCA会員　青木恵子